

鎌倉中期の京・鎌倉における漢籍受容者群

福島金治

「管見抄」と「鳩嶺集」のあいだ

Group of Recipients of Chinese Classics in Kyoto and Kamakura in the Mid Kamakura Period : Between Kanpensho and Kyureishu

FUKUSHIMA Kaneharu

はじめに

- ①「管見抄」と「鳩嶺集」の奥書と問題点
- ②石清水八幡宮田中家と鎌倉
- ③後嵯峨院侍医和氣種成と実時本「芥民要術」
おわりに

【論文要旨】

鎌倉幕府の要人の漢籍受容は、北条時頼・実時らの漢籍志向の性格、清原・藤原両家らの儒者との関係、武家文庫の形成などについて研究されてきたが、当該期の公武関係からの検討は不十分だった。本稿では、実時撰ともされる「管見抄」を石清水八幡宮の良清編「鳩嶺集」を媒介に検討し、鎌倉と京都の漢籍受容者群の基盤が共通すること明らかにした。

「管見抄」は「白氏文集」の要文を抄出したもので永仁三(一二九五)年に「関東田中坊」で書写された。本稿では寺坊に「関東」をつける例に注目した。その結果、遺身院が京都下河原門跡、犬懸坊が日光山別当、大藏が小河口の鎌倉住坊の性格をもっており、「関東」を付した場合は鎌倉外に拠点をもつ人物の鎌倉住坊に付された例が多いことを明らかにした。こうしたことから、田中坊は石清水八幡宮の鎌倉住坊の可能性があろう。

石清水八幡宮と鎌倉との関係は、別当宗清と六波羅探題北条重時の親密な関係が知

られていたが、「鳩嶺集」は注目されてこなかった。同書には北条時頼らの頼文等が含まれ、作者は菅原為長・藤原経範などである。両者やその子孫は鎌倉と緊密な関係にあった。鎌倉と京都の交流には「鳩嶺集」にあらわれる人物が介在していた。その顕著な例が実時本「芥民要術」である。底本は和氣種成本で、種成の漢詩も「鳩嶺集」にある。種成は後嵯峨院の侍医で、藤原明範らと良清主催の漢詩のサロンを形成していた。実時による同書の収集は小侍所別当の職務などと関係していたとみられる。このことは実時が同書の校訂を「阿婆縛抄」の作者承澄や宗尊親王正室宰子の甥近衛家基の本で校訂している点から推察できる。「鳩嶺集」にみえる人脈は、「芥民要術」の伝来に濃厚にみられる。後嵯峨院とその子宗尊親王を媒介に形成された公武の安定的関係は、京都・鎌倉での漢籍の伝授と受容に共通する人的基盤を生み出したといえる。

【キーワード】「管見抄」、「鳩嶺集」、石清水八幡宮、金沢文庫、後嵯峨院